

北の国から 83冬 倉本 聰



理論社

北の国から'83

〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
古金一郎方

S.U. 中国へ本を送る会本部
(大阪花甲協会贈書会)

電話 06-441-4 3 9 7

北の国から
'83 冬

1983・初版

著者 倉本聰

制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話 ○三(203)五七九一

振替 東京九―九五七三六

NDC912 四六割 19cm 178P 0093-90235-8924

発行日 一九八三年三月 第一刷

北
の
国
か
ら
'83
冬

本書は一九八三年三月二十四日フジテレビ系全国ネットで放送されるドラマのシナリオです。

読者へ 倉本聰

これは、一九八一年十月から翌年三月にかけてフジテレビ系で放映された連続ドラマ「北の国から」の続編に当たる二時間ドラマのシナリオである。

黒板五郎（田中邦衛）は北海道富良野市麓郷（ふくこう）の農家の息子。故郷を捨てて上京し、宮前令子（いしだあゆみ）と結婚、純（吉岡秀隆）と螢（中嶋朋子）の二人の子をなすが、東京の生活に馴染めず、妻の令子にも裏切られて二人の子を連れ故郷麓郷に帰ってくる。そしてかつての生家である廃屋に電気も水道もない生活を営み始める。令子の妹雪子（竹下景子）は妻子ある男との恋に破れ、一家を追って来て一緒に暮す。

その一年の暮しの中で都会の子である純と螢は徐々にこのプリミティブな生活に馴れ、父と共に手作りの丸太小屋を土橋の廃材で建て上げて漸くそこに移れたのだったが丁度その時母親令子の突然の死という悲報に接する。

母を失った純と螢は父と共に再び麓郷で暮し、雪子はそのまま東京に残る。

以上が一九八一年秋までの、黒板一家の生活記録である。

そうして一九八二年暮、このドラマは東京で幕を開ける。

宮前雪子

手紙を書いている。

雪子の声「純君、螢ちゃん、お元気ですか。あれからもう一年半になりますね。富良野のみんなは元気でしょうか。昨日、突然お父さんとクマさんがみえ、本当にびっくりしてしまいました。あれからのことをいっぱいきました」

ジングルベルがしのびこむ。

喫茶店

雪子と五郎、クマが逢っている。

雪子の声「中畑木材が火事で焼けたこと。初めてきいてびっくりしました。おばさんが働いたあの工場も、今は新しくなったんですってね。本当に何も知らないで、お見舞一ついえなかったこと。ショックを受けています。でも——」

雪子

雪子の声「それに負けないくらいおどろいたのは、お父さんとクマさんが十一月からこっちに出稼ぎにみえてたつてことです。そうして純君と螢ちゃんがたった二人で暮らしてゐるつて話。きつと二人とも大きくなったのね。大丈夫ですか？ 寒くないですか。恐くないですか。ごはんはちゃんと食べられてますか？」

クリスマス・ツリー

雪子の声「お父さんたちとは昨日新宿で、おひるをご一緒して別れました。お父さんたちは二十九日の夜行で富良野へ帰るのだとおっしゃってました。お正月をあなたたちと過ごせることが、何より愉しみだとおっしゃっていました」

デパート・玩具売場

その賑わい（クリスマスセール）。

雪子の声「今東京はクリスマスセール。どこへ行ってもジングルベルです」

五郎、ケチな買物を売り場へ運びつつ、黒山の人だかりにわりこんでのぞく。

雪子の声「あなたたちに小さなプレゼントを、物だけはいっぱいある東京から送ります。メリー・クリスマス！そして、ハッピー・ニューイヤー！」

五郎の視線。

コンピュータゲームに目の色変えている子どもたち。

そして大人たち。

口をあけ、ぼんやり見ている五郎。

熱中している子どもたち。

その輝いた顔、顔、顔。

圧倒的なジングルベル。

コンピュータの上に出現し消える都会の文明。

突然、それらがスッと遠のき。

モニターの画面を風音がかけぬける。

そしてその画面に雪が降りだす。

雪原

その中の一本道。

地吹雪が激しく横切って過ぎる。

その道を――

かなたからポツンとソリを引きやつてくる純と螢。

二人は地吹雪と降る雪に抗し、食料を積んだソリを無言で押してくる。

雪煙激しく舞い、二人うつむいてやり過ごす。

音楽――テーマ曲、静かにイン。

また、歩きだす二人。

激しく降る雪と地吹雪の中、二人、少しずつ近づいてくる。

タイトル流れて。

1

丸太小屋（以下、家と書く）表

どこかで自動車のホーンが高く鳴る。一度。二度。三度。

純「（とび出して）ハ―イ!! 今行きま―す!!」

同・中

純「（とびこんで）草太兄ちゃん迎えに来たゾッ!!」

螢「（二階から）今行くッ！ お兄ちゃん火の始末お願いッ」

純「もう見たよッ!!」

螢「もう一度ちゃんと！ 指さし確認!!」

純「うるせえなもう！ 暖炉！（指さす）消したッ。ストーブ（指さす）フタした

ッ。——フタしてなかった」

表

とび出す二人。

雪の道

二人走る。

雪原

二人走って草太の車へ乗る。

純「お待たせしましたッ」

螢「ごめんなさいッ」

純「アレ、時夫兄ちゃんも一緒に行ってくれるの？」

時夫、乱暴に車をスタート。

景色

フロントグラスに走る。

純の声「こないだお兄ちゃん探したんだよ。風力発電凍っちゃってさア、電気なしですよここんとこ四日。中畑のおじちゃんは今山行ってるしさア、哀れな子どもが二人で闇の中——え？」

走る車内

螢、純をつついている。

純、螢を見、螢の目くばせに前の二人を見る。

運転席の時夫と助手席の草太。

何となくようすが変である。

時夫、突然カセットを入れる。流れ出す音楽。

草太手をのばしすぐに消す。顔見合わせる純と螢。

間。

草太「(突然) じゃあ本当に断わっていいんだな」

時夫「――」

間。

草太「ア、ソウ」

時夫「――」

草太「ならいいよ、お前がそういうなら」

時夫「――」

草太「断わるべ。アア。断わろ。きっぱり断わろ」

時夫「――」

間。

草太、憤然とカセットを入れる。

流れ出てくる松田聖子。

飛ぶ景色

草太の口笛。

——しばらく。

草太「（突然）鏡があるのかおめえんちには、え？」

時夫「——」

草太「てめえの面と齡棚にあげて、よくまア相手のことガタガタいえるよ」

時夫「——」

草太「これじゃ農家に嫁こねはずだ」

時夫「——」

草太「おまえんちも終いだわ氣の毒にまア。三代かかってきずきあげた畑。——おや

じさん泣くべな、おふくろさんもな」

時夫「——」

草太「よくいうよその面で、相手がブスだなんで」

車、いきなりガクンと止まる。

激しいドアの開閉音。

草太「コ、ノ、野郎！」

雪原

止まった車から逃げだす時夫。草太追いかけてつかまえて、

草太「コノ（ドック）まだ（ドック）話（ドック）終ってねえべ!!」

ふたたび走る車内

草太運転。助手席の時夫。

純と螢。

草太「まったくナンでオラこんなことしてるの!」

時夫「――」

草太「やんなるわまったく。人のため、人のため!」

時夫「――」

草太「てめえの嫁さんだってまだだつてのに」

語、（純の声）「拝啓、恵子ちゃんお元気ですか」